

「新日本歌人」 utabito net短歌セミナー

2022. 2. 5・津田道明

* 自己紹介：私と犀川スキーバス事故

* 今回の報告の元となったもの 「あいち勤労者大学」短歌教室

- ・ (毎月第3月曜13時半～16時・名古屋市総合福祉会館)
- ・ 年間の短歌教室講義予定

第1回 (2021年11月) ～3回 基礎編

11. 短歌の成り立ち、12. 短歌のカタチ、2022. 1. 短歌の言葉)

第4回～12回 テーマによる短歌作品鑑賞

- 2. 相聞歌と挽歌／古典篇、3. 同／近現代短歌編、4. 自然の短歌／古典篇、
- 5. 同／近現代短歌編、6. 暮らしの中の短歌、7. 社会と短歌、8. 戦争と平和の歌、9. 現代と短歌、10. まとめ

歌のなりたち I

- 歌の成立の問題を考える最も有力な素材は、万葉集。

全20巻のうち、巻一、二がまず最初に成立したという点についてはほぼ定説となっている。

制作年の最も新しい歌は、天平宝宇三年(759)の大伴家持歌。舒明朝から百年を超える。

巻一は「雑歌」、巻二は「相聞」と「挽歌」という構成(部立て)になっていて、主題を意識して、分類し、ほぼ時代順に配列している。ここに万葉集巻一、巻二をまとめた編集者の、歌及び、「歌集」についての考え方がみられる。 *資料1

- 巻一の最初の歌は、雄略天皇歌、巻二は仁徳天皇の皇后磐姫の歌。

では、両巻の二番目の歌はどうか。

巻一は舒明天皇の国見歌、巻二の相聞歌は天智天皇の歌を、挽歌については、斉明天皇の代の有間皇子の刑死に関わる歌を置いている。巻頭歌と二番目の歌の時間的空白は、巻一、二とも世紀を超えている。

- 第一巻の巻頭歌は第二首の舒明歌と比較すると、雄略歌は、歌体からすれば古歌の印象を拭えず、舒明歌に比べれば、国見歌というより、「歌謡」に近い。

巻二の磐姫歌は、歌体もまた内容的にいても、とても仁徳期のものとは思われない。

- ではなぜ、この二巻の巻頭歌が、雄略歌であり、仁徳妃歌でなければならないか？

記紀によれば、雄略天皇はとりわけ朝鮮半島の経略に積極的に関わったという意味において特筆され、仁徳天皇は神性というよりは、徳性を持った天皇像を代表している。

雄略歌は、古事記下巻の天皇観を反映し、磐姫の天皇への愛憎歌は、古事記における仁徳天皇の記述とのバランスを考慮した歌の選択として、作者未詳歌として歌い継がれてきたものをここに当てたものだとすれば、古事記、万葉集巻一、二の関係は整合する。

編者が古事記を校合していたことは、歌の注釈にも書かれていて、強い影響力を受けていることが感じられるが、或いは、古事記、万葉集巻一、二の編者間にはさらに強い靱帯があったか。

ともあれ、万葉集巻一、二の巻頭歌は、7世紀末から8世紀初めにかけての時代を生きる人たちの歴史認識が反映し、万葉歌の精神世界を表現しているといえよう。 注2

古事記の歴史意識と万葉集

- 古事記三巻は、712(和銅5)年、稗田阿礼が誦したものを、太安万侶が撰録して書きあげたと序にあり、その文体は、いわゆる漢文によらず、表記について、訓と音を交用しながら表すことにした独特の方法に拠っている。

古事記三巻の構成をみると、「上つ巻」は、「天地開闢」からの神代の世界を、「中つ巻」は神武から応神天皇までの神性を持った天皇を、「下つ巻」は仁徳天皇から推古天皇まで下限としている。注3 古事記下つ巻は、神代および神性をもった天皇像ではなく、武に長け、有徳の支配者像が鮮明である。「仁徳」という漢風諡号がそれを象徴している。

古事記編纂にあたって、これを主導した人たちは、この下つ巻の下限、推古天皇までを古き時代とし、これに続く時代は当代、現代であると認識している。巻一、二の巻頭歌に続く歌は現代の歌である。つまり万葉集は、古歌を天皇の治世に従って配列したのではなく、時代区分を明確にした編者の歴史意識が働いている。よみ人知らずとされる中の古歌をのぞけば、舒明朝以後に歌は急増するが、これはあたかも、古事記の精神世界を、万葉集が引き継いだものの如くである。

歌のなりたち Ⅱ

万葉集には、古事記や古今和歌集の「真名序」（紀淑望）と「仮名序」（紀貫之）に相当する「序」を欠いている。口承的に伝えられてきた歌を「歌」として論じるには至っていなかった中で、古今和歌集の両序は、短歌史的には大きな意義を持つ。

(1) ひとのこころを種として

「やまと歌は人の心を種としてよろずのことはとぞなれりける。世の中の人ことわざしげきものなれば、心におもふことを見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり」

仮名序は、「歌」の内発性をとらえながら、同時にまた、歌は作者の外的世界との交わりを契機として表出するものとしている。いわば短歌本質論であって、これにより、両序、とくに仮名序を「歌論」の嚆矢とする。注3

(2)「和歌」について

- 仮名序の「やまとうた」の部分は、真名序では「夫和歌者」(それわかは)。
別の箇所、「こきんわかしふ」と読みを指定していて、ここに初めて「わか」が登場する。
和歌(わか)という言葉は、万葉集にはない。万葉集に一貫するのは「歌」。
- 万葉集巻一の第二首、「高市(たけち)の岡本の宮に天の下知らしめす天皇の代」として、
舒明天皇「御製歌」を置き、この舒明歌に対し、「…間人連老(はしひとのむらじおゆ)を
してたてまつらしめたまふ歌」およびその「反歌」を、さらに続けて「…軍
王(こにきしのおおきみ)が山を見て作る歌」とその「反歌」とする。
- この詞書の表記形式が一般的だが、次に見るように、柿本人麻呂の45番の安騎野歌
によって表記に変化が見られる。「短歌」の登場である。注4

・ 軽皇子が安騎野で野宿した時に、柿本人麻呂が長歌を歌い、その「反歌」にあたる四首を添えているが、ここで初めて反歌ではなく「短歌」という表現が使われていて、校注の伊藤博は「反歌」よりも「長歌に対して独自性の強い語」としている。

・ 確かに、四首は長歌に対応する反歌というよりも、独立性が高い。そのうちの一首、

東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ (46) 注4

人麻呂歌の長歌の全部がそうではないが、「反歌」ではなく、「短歌」と表記される歌が多い。おそらく、柿本人麻呂歌集によって、編者はこれに従ったと思われるが、ここにも「歌」についての一定の価値認識がある。

国語辞典の「和歌」の「和する歌」

- 国語辞典の「和歌」の項目はおよそ、次のようである。
 - 1) 漢詩に対して、日本で行われた定型の歌。奈良時代には「倭歌」と書き、やまとうた、とも。
 - 2) 和する歌、かえしうたとして、奈良時代に「和歌」とあるのは、この意味。
 - 3) 平安時代以降はもっぱら長歌や施頭歌ではなく、五七五七七で終る歌を指している
- 「倭」については後記するとして、2) について考えて見たい。

巻一に戻れば、「和ふる歌」（こたうるうた）、「和へまつる歌」（こたえまつるうた）というように使われている。巻一にはいわゆる名歌が並んでいて、例えば額田王の歌に対して、大海人皇子が「答へたまふ歌」として次の二首がある。

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る (20)

紫草のにはほへる妹を 憎くあらば 人妻故に われ恋ひめやも (21)

また、麻統(おみの)王(おおきみ)が伊勢の国の伊良の島に流されたことを人が哀傷して作った歌とこれに麻統王が「感傷(かな)しびて和ふる歌」二首がつづく。

打ち麻を 麻統の王 海人なれや 伊良虞の島の 玉藻刈ります (23)

うつせみの 命を惜しみ 波に濡れ 伊良虞の島の 玉藻刈り食す (24) 注4

近親者の関りだけでなく、たとえば万葉集巻二〇の巻頭の元正天皇の歌の詞書をみると、臣下に、自分の歌に応えることを求めている。

先(さきの)太上天皇(おおきすめらみこと)、陪従(べいじゅ)の王臣に詔して曰(のりたま)わく、「それ諸王、卿等、よろしく和(こた)ふる歌を賦(ふ)して奏すべし

歌の成り立ちを考える時、歌が、どのような場面で、どのように誕生してきたのかを考えると、こうした、万葉歌の“対話性”について考えることが重要だと思わざるを得ない。

万葉集から「仮名序」にいたるまで

- ・万葉集が最終的にまとまったと思われる奈良時代の終わりから平安時代初め（桓武～平城天皇）より古今和歌集撰上（905）までのおよそ、一世紀は「歌」の空白の時代なのか。「国風暗黒の時代」などと言われたりするが。
- ・言いかえれば、「仮名序」は、突然に現れたものなのだろうか。
- ・むろん、紀貫之という歌人の出現が大きかったことは論を待たないが、それ以上に、平安時代初期から10世紀にかけてのさまざまな文学的達成があって、例えば勅撰漢詩集の成立の影響も大きかったし、漢詩人歌人の活動も重要だったのではないか。

小野篁、あるいは紀氏の存在

- ・例えば、9世紀前半の小野篁。文章生を皮切りに、官人として有力だったが、遣唐副使のことで嵯峨天皇の譴責を受け、838年隠岐に流される。この時の歌が百人一首にある。

わたの原 八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよあまの釣船 注4

- ・また9世紀半ばには、小野小町（生没年不祥）や業平らが活躍しているが。古今集の前、9世紀末には、菅原道真によって、『新撰万葉集』（上）がまとめられる。

道真は、三代にわたった漢学の家に育ち、漢学者としてもまた儒学者としても稀有な文人政治家だったが、百人一首中の道真歌の氏名表記が「菅家」となっていて、「天神」となった道真の存在を特別のものとした定家の自覚を表わしていよう。注5

紀氏はどうか。

- ・紀氏が、記紀に登場する場面は、4-6世紀を中心とした朝鮮半島における倭国の経略である。日本と朝鮮の間、対馬を挟んで、対馬海峡と朝鮮海峡の二つの荒海を渡り、兵士と武器、物資を運ぶことは、古代にあって最も困難な事業の一つであった。記紀には葛城氏と紀氏の記述がとりわけ目立っている。（注6）

紀氏の本貫が紀国であり、海運と木材資源に恵まれていたことが想起される。

- ・しかし、武門に有力であった紀氏は諸豪族の争いで地位を弱めるが、そのなかで、紀氏一族は異なった世界で地歩を占める。

「令和」の元号の出典の、大宰府における梅花の 宴三十二首に、太宰師であった大伴旅人に次いで、大貳の職にあった紀男人歌が最初にある。730年のことだ。

この宴には筑前国司の山上憶良も同席している。

正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招 (を) きつつ楽しきをおへめ (819) (注4)

- また、注目したいのは、古今和歌集真名序を書いた紀淑望の父、紀長谷雄である。845年生まれの長谷雄は文章得業生となり、文人官僚として地位をあげ、大学頭（895年）に登ってゆくが、長谷雄に惜しみない援助を与えたのは菅原道真だった。

讃岐の国司の時の寒早十首など、古代の政権中枢にあって、民衆の悲惨な生活の現実を詩として歌い、文書化して提起したのは、ほとんど、道真ただ一人と言って良い。

（注7）

その道真が、藤原時平の陰謀によって大宰府に流され（901年）、没する（903年）までの大宰府での詩文を届けるように遺言した、その送り先こそ、紀長谷雄だった。

- 最初の勅撰歌集は、漢詩詩集であったが、それを担った漢詩人、文人政治家の少ない人たちが、このように、歌の世界においても糸を紡いでいたことを私たちは見ておきたい。そしてさらに検討をすすめれば、なぜ漢詩人たちは、歌の糸を紡いだのか。

漢詩とやまとうたー政治と文学

- 万葉集の原基、巻一、二から、さらに編纂が進められる中、751年には最初の漢詩集である『懐風藻』がまとめられている。作品は天智天皇時代のものも含めて約120篇。
こののち、勅撰三詩集としては814年から827年にかけて、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』が嵯峨天皇の時代に撰上されている。
- 朝廷における公文書は漢文体。漢詩文にいかに通じているかは極めて重要であったが、諸豪族を圧して藤原氏が権力の中樞を掌握し、天皇家との外戚関係を固める中で、いかに漢詩文に通じていようとも、その力を発揮できるかどうかは極めて微妙なものとなる。
小野篁がそうであったし、紀長谷雄の道真との距離感にもそれはあらわれている。
- また、唐帝国自身も十年に亘る黄巢の乱で衰退し、長安は灰塵に帰す。こうした内外の政治環境の激動は、儒教主義と漢詩文の世界に生きることに大きな影響を与えた。このなかで、大伴家持が歌ったように、「悽惻の意、歌に非ざれば撥ひ難きのみ」という世界が一方にあった。

最後に「倭」と「和」

- 「倭」（ワ）は中国の史書（「漢書地理誌」、「後漢書」などに登場する倭国という名にある通り、国名に使われ、古事記の天皇表記も神武から「倭」をヤマトと読ませている。

律令国家となって以後も地域、地名を示す場合には大和の国を「倭国」「大倭国」としている。

一例だけ例外があって、ヤマトタケルの「夜麻登は国のまほろば」というヤマトは倭ではない。

万葉集の大津皇子への大伯皇女の歌も、原文は全部万葉仮名だが、ヤマトだけ原漢字表記にすると、「わがせこを倭へやると・・・」である。

ところが、地名以外の歌ことばの「ワ」は「和」を以てあてている。同様のことは、古事記の音仮名表記にもあてはまる。

- この点、日本書紀では、ヤマトを対外的な表記には「日本」としていて区別がある。

「倭」という国名表記を変更してきたように、「倭国」の「ワ」音の音仮名表記についても、律令国家の形成とともに「和」が広まっていったのではないか。

わずか一音だが、ここにも、言葉と文字についての先人の苦戦苦闘を私は感じる。 （注8）

注及び参考文献

1. 新潮日本古典集成『万葉集一』 解説「萬葉集の生い立ち(一) 卷一～卷四の生い立ち」 伊藤博 1976年
2. 新潮日本古典集成『古事記』 解説・西宮一民 1979年
3. 日本古典文学大系『古今和歌集』解説佐伯梅友 岩波書店 1958年
4. 歌については、前掲1のほか、『新訓万葉集』(萬葉集概説佐佐木信綱) 岩波書店 1954年、及び『万葉集 「新編国歌大観準拠版」(伊藤博校注) 角川書店 1985年を参考にした。
なお万葉集における部立については佐佐木の、『新訓万葉集』概説に、各巻の部立の一覧がある。
5. 『百人一首を楽しく読む』 井上宗雄 笠間書店 2003年 他
6. 「紀氏に関する一試考」 岸俊男 (『日本岩波古代政治史研究』) 塙書房 1966年
7. 『菅家文草 菅家後集』日本古典文学大系 岩波書店 1966年
8. 「問題がひそむ万葉集の用事法」(『古代史からみた万葉歌』) 岸俊男 学生社 1991年

このほか、万葉集については、『万葉集必携』及び『同Ⅱ』(稲岡耕二・編が研究史も含めて総括的である。また1の解説に付された「舒明皇統系図」および万葉集編纂表も、成立過程を検討するにあたって参考となった。